

# 自閉スペクトラム症児に対する母親の話しかけの特徴

—mind-mindedness の観点から—

佐藤 弥永子

**【背景・目的】**養育者との安定したアタッチメントは、子どもの他者理解の発達の基盤となり得る (Siller & Sigman, 2002; 狗巻, 2007)。子どもの安定したアタッチメントを予測する養育者側の要因として、mind-mindedness (MM) という、子どもに対して心を持つ個人とみなし、心に焦点を当てて接する養育者の傾向がある (Meins, 1997)。乳児期に母親の MM が高いほど、子どもは後に安定型のアタッチメントタイプを示しやすく (Meins, Fernyhough, Fradley, & Tuckey, 2001)、子どもの行動障害が緩和されることが示されている (Meins, Centifanti, Fernyhough, & Fishburn, 2013)。自閉スペクトラム症 (ASD) 児においても同様の効果が期待されるが、ASD 児を有する母親の MM に関する研究は非常に少なく、ASD 児の養育者の MM と子どもの行動との関連を直接調べた研究もほとんどない。本研究では、ASD 児と定型発達 (TD) 児を対象として、子どもに対する母親の MM 発話の量や質に違いがあるのか、また、母親の MM 発話と子どもの行動に関連があるのかを検討することを目的とした。

**【方法】**協力者は、大学における個別療育に参加した ASD 児とその母親 16 組、及び対照群として研究に参加した TD 児とその母親 12 組であった。ASD 群について、1 回目の個別療育の中で行われた母子遊び場面とおやつ場面それぞれの記録映像を再生しながら観察を行った。TD 群については、大学の療育部屋または協力児の自宅の母子遊び場面とおやつ場面のビデオ撮影を行い、後に記録映像を再生しながら観察を行った。観察内容は、子どもに対する母親の発話と子どもの行動であった。母親の発話と子どもの行動それぞれに下位カテゴリーを設定し、各カテゴリーにつき 10 分当たりの生起頻度を算出して分析を行った。

**【結果と考察】**母親から子どもに対する発話全体及び MM 発話の生起頻度は、ASD 群、TD 群の間で類似しており、Kirk & Sharma (2017) の研究と同様、子どもが ASD であることが母親の MM に量的な影響を与えるわけではないことが示唆された。しかし、母子遊び場面において、ASD 児の母親は TD 児の母親に比べて子どもの欲求状態に関する MM 発話が多かった。言葉による表出が TD 児に比べて困難な ASD 児の要求を、母親が適切に読み取ろうとしていたのだと考えられる。また、母親の MM 発話が多いほど、子どもの社会性発達の足場が形成され、子どもが大人に目を向けたり大人の関わりかけを受容したりすると予測されたが、その予測を支持する結果は得られなかった。その一方で、おやつ場面において ASD 群、TD 群ともに母親の MM 発話が多いほど、子どもは母親に多く接触していたことが分かった。母子遊び場面では、両群において母親の MM 発話と、子どもと母親の接触の生起頻度に関連は見られなかった。おやつ場面では、母子遊びとは異なり、見慣れない大人がいるため、母親が子どもの心を代弁しているほど、子どもは母親に接触するアタッチメント行動を示していたと考えられる。TD 児と同様に、ASD 児が母親とのアタッチメントを安定させるためには、母親が子どもの行動から心的状態を読み取ろうと努めることが重要であると考えられる。本研究の結果から、母親が子どもの気持ちを汲み取った話しかけを行うことで、見知らぬ他者がいる場面で接触による子どものアタッチメント行動を増やし、ASD の子どもが持つ対人関係についての不安を緩和する効果がある可能性が示唆された。(比較発達心理学)